



茅ヶ崎市教育センター
Chigasaki Education Center

子どもたちのために
ともに教育環境を考える
教育センターの教育情報

学びあう響きあう

第12号
平成28年12月1日発行

編集担当/茅ヶ崎市教育センター
住所:茅ヶ崎市十間坂三丁目5番37号
TM 研究研修担当 (市青少年会館3階)
☎0467-86-9965
TM 青少年教育相談担当 (同館2階)
☎0467-86-9963
URL:<http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/1005049/index.html>

幼児期の教育についての研究から見えた

子どもが学び、育つために大切なこと

乳幼児期の子どもは、遊びの中からたくさんのことを学びます。それは、その後の学びの基礎になっていくことでしょう。

そして、子どもの「学び」「育ち」を支えるのは、子どもを見るおとなの「まなざし」ではないでしょうか。

第12号では、子どもの「学び」「育ち」にかかわる2つの講演内容を紹介します。

【Contents】

- 「遊びの中で子どもは育つ—子どもの『遊び』を大切に—」より抜粋
聖心女子大学教授 河邊貴子氏、乳幼児期の子育て・子育て出前講座、平成28年4月23日(土)
- 「子どもをみつめる親のまなざし—子どもの育ちを共感的にみつめ、支えるために—」より抜粋
田園調布学園大学教授 高嶋景子氏、乳幼児期の子育て・子育て講座、平成28年6月7日(火)

遊びの中で子どもは育つ—子どもの『遊び』を大切に— した子育て・保育—

平成28年度開催「乳幼児期の子育て・子育て出前講座」より抜粋
(講師 河邊貴子氏、H28.4.23開催)



子どもは遊びの中で学ぶ

ある保育園に行った時、年長の子が砂場で型抜きをして遊んでいました。近くにある水を貯めたらいから水をすくっていたのですが、その様子をじっと見ていたよちよち歩きの子がまねをし始めました。

道具を一つとって水をすくってみました。うまく水をすくえませんでした。その瞬間、1歳

ぐらいの子は、「えっ〜」という顔をして、「お兄ちゃんはやんと水をすくっていたのに、なんで私はできないの。」という表情を見せました。それから、もう1回やってみる。それを10回ぐらい試しました。「ジャー」と水が出るのも楽しい。でも、はたと我に返って、別の道具を取りに行きました。

まねることは学ぶ語源ですが、子どもは学ぶ時にまねるのです。よ〜く見てまねをしながら、子どもは「あー、ちょっと違うな」「なるほどこうか」ということを発見しています。それが遊びの中にたくさんあるのだと思います。子どもは遊びの中からたくさんのことを学んでいます。実は、そこで学びが私たちの人生の土台になっているのです。

心を寄せる

ある幼稚園の5歳児です。幼稚園にある望遠鏡で野鳥を発見しました。友だちに望遠鏡を貸して、「ねえ、見えるでしょう」と言っているのです。見ているのは一人の友だちですが、本人、周りの友だち、みんなが同じ方向に心を寄

せています。これはすごく大事なことです。

今、熊本ですごく大変なことが起きています。自分たちの身には起きていない。しかし、きっと大変だろうとまなざしを熊本の方に向けています。自分には見えていないけれども見えている人に心を寄せているというのは、おとなになってからそういう心持ちにつながってきます。

今の子どもたちは・・・

今の子どもたちは、「生活習慣が不規則である。」「コミュニケーションが不足している。」「我慢する心が不足している。」「運動能力が低下している。」など、いろいろな力が欠けていると言われていて、20年前から言われていることです。

これは、幼児を対象にした調査で明らかになったものですが、子どもが悪いわけではありません。社会の仕組みが変わってきたことで、子どもが思う存分試したり、運動したり、遊んだりする経験が少なくなったので、運動能力が低下するのは当然です。遊びは、やりたいことだけやっているの

はなく我慢も必要ですから、遊びが不足すればそういう気持ちも不足します。

多くの場合、友だちと遊びますので、コミュニケーション能力も昔の人に比べてしまえば、不足してしまいます。

こういった困った状況を解消しようとする、やっぱり子どもに自由な時間と自由な空間、それから自由な意志が尊重される遊びが必要だと考えます。

昔の遊び

昭和30年代ぐらいは、野原を駆け回ったり、草花を摘んだりして生活と遊びが結びついていました。生活の中で、子どもはおとなに見守られていました。

生活や遊びや労働が常に一緒くたで、その中で子どもたちはおとなの様子を見てまねながら、生活に必要な知恵や技術を学んでいました。

50年もの間に生活は便利になりました。しかし、生活の便利さと引き換えに、本当に必要な知恵や技術というのを見て学ぶことができる経験がほとんどなくなってしまったのです。

教えられ続けると 学ぶ意欲は低下する

今は、教えられて学ぶことが多いです。ところが教えられ続けると学ぶ意欲は低下します。

今、日本の子どもたちは、中学生ぐらいになってくると、一日の家庭学習の時間は平均15分です。あとはどうしているのでしょうか。塾に行っているのです。自ら学んで自ら考えることが、24時間のうちのたった15分です。あとは、常に教えられている生活になっています。だから伸び悩んでいるのではないかと思います。何となく、そんな気がしています。

これは、世界中の比較調査でも明らかになっていることですが、日本の中・高校生の自己肯定感はこの国よりも低いです。

それに比べ、アメリカの子どもは自己肯定感が高く、小さい時から「Good Boy」「Good Job」と言われ続けているので、「僕は何でもできるんだ。」とっています。

ところが、日本の子どもは、どこかで自ら決めることが許されなくなってきていて、比較の中で生活するようになっていきます。だから、どうしても自己肯定感が低くなってしまふのだと思います。自己肯定感が低くなると、自分がやりたいものを積極的にやるといのが低くなるのは当然です。ですから、自己肯定感はずっと維持していきたい訳です。

遊びを通して自己肯定感が 高まっていく

例えば、お金がたくさんあったとしても、自己肯定感が低かったら多分幸せではありません。だから、いつも満足して嬉しいなという気持ちで一生活らしてほしいと思っています。そのために、人生最初の1ページである乳幼児期には、特に遊びの中で「楽しいな」という気持ちや自己肯定感が高まっていく状態に持って行ってあげたいものです。富士山みたいに裾野が広ければ頂点が高いのと同じです。裾野が狭いと頂点がぐらぐらしてしまうので、その裾野を広げるのに、遊びの体験はすごく必要ではないかと思っています。

私からの提案ですけど、今、子どもが置かれている状況というのを大切に、子どもたちが誰かとかかわりながら遊ぶ。そういう世界をできるだけ守ってあげたい。そして、守るといのは、時間や空間だけでなく、「それ、いいね」と共感してあげることだと思って、そういうまなざしを欠くことなく守ってあげたいです。

オーバーフローした時は

もちろん、遊びというのは度を越すことがあります。戦いごっこをしているうちに、だんだんパンチが強くなるとか、最初は水だけで遊んでいたのが、友だちに水を

かけてしまうとか・・・。オーバーフローする時があります。その時は、「それちょっとやりすぎじゃない」と言ってあげればいいです。しかし、今の状態をみていると、オーバーフローする前に止めてしまうことがどうしても多くなっています。「自分の家はよくても、よそのお子さんに迷惑をかけてはいけない。」という気持ちから、オーバーフローする前に止めてしまうのだと思います。本当は、世の中全体がもっとおおらかになればいいのですが。

オーバーフローは、遊びがちょっとつまらなくなったり、どうしていいかわからなくなったりすると起こります。それを見逃すことも絶対にいけないですし、それがなぜいけないのかということも言わずに怒るのもいけません。オーバーフローした時の声のかけ方を工夫するといいと思います。お家では、なかなか難しいところがありますが、幼稚園や保育園は、保育士さんがいて、プロフェッショナルがいる場所ですので、そうやって介入してくれるでしょう。

楽しいから納得するまでやる

そもそも遊びは何かということ、自分からやること、楽しいからやることではないでしょうか。自分からやる、楽しいからやる、だから納得いくまでやることなのです。同じ事をやり続けるのです。もう1回、もう1回と何度も言って、繰り返しやるのです。繰り返しやりながら少しずつやり方も変えています。それをおとなが見ると、「自分の全力を発揮しているな」「自分の能力をさらに高めようとしているな。」と思うのです。それがおとなから見たまなざしです。子どもがやっていることを共感の目で一緒に見て、「十分に好きなようにやっていいんだよ。」と共感してあげる。実はそれで「自分は愛され守られているんだな」ということを子どもが感じるのです。

「自分がやっていることは素敵なんだ」ということをお父さんお母さんが思ってくれている。これは、子どもにとって何より嬉しいことです。

～遊びとは～

- 自発性（自分からやる）
- 自己報酬性（楽しいからやる）
- 自己完結性（納得がいくまでやる）

遊びの中で大事なものは

1 自然とのかかわり

私たちの体は自然でできています。だから、子どもは自然へ自然へと行きます。自分の本体と近いものです。本当は自然に近い方が体に良いことなので、子どもはそれをととてもよく知っているのです。自然とかかわる中で、「自分からやる」「楽しいからやる」「納得するまでやる」というのが、子どもに一番求められていることです。

特に遊びの中では、自然とかかわる遊びが大事です。

自然というのは、目でもきれいですし、風も気持ちがいいですし、感覚がフル稼働します。自然の中では、感覚がハーモニーを起こすみたいにフル稼働します。2歳ぐらいの子どもでも、桜の花びらが散ると「わあ～」と言い、嬉しくなります。1歳の子どもでも、風がほっぺたをなでると幸せそうな顔をします。自然の中には、偶然や発見、探求がたくさんあります。探検ごっこや草で遊ぶのは、そこにいろいろな発見があるからだと思うのです。私たちの体は自然でできていますから、その体験が原体験になります。

2 イメージの遊び

もう一つが、イメージの遊びです。イメージというのは、目の前に存在しない出来事を想像したり、出来事の間を関係付けたりします。イメージするというのは少し時間の概念がないとできません。見たものを後で再現する。これはだいたい1歳半頃から見られるようになると言われています。これがすごく面白くて、大人のして

いることをじっと見て、後で反応し始める時期、遅れて模倣するので遅滞模倣と言いますが、そういうことができるようになります。

物語を紡ぎながら

身につけている力とは

子どもがレストランごっこをやっていると、「待っていてください。」と料理がなかなか出てきません。なぜこんなに出てこないのかと言いますと、おとなでしたらいっぱい作っていて、注文があったらパツパツとお皿について出します。しかし、子どもは注文が来てから焼くふりをしているのです。これだから時間がかかるのです。子どもは、今、夢中になると全体をどうしようかというところまでは、まだ気がいきません。全体はわかっているも全体を意識しながら動くことがなかなかできません。

子どもは、自分の物語を作っています。一人ひとりが人やことなどにかかわりながら物語を作り出しているというのが、子どもの遊びだと思えます。こういう物語を作りながら身につけている力があります。

一つは、想像力です。見たこと物からどんどん想像する。体験したことからどんどん広げていきます。

それから遊びの中にはだんだんと言葉が入ってきますので、他者に自分の気持ちを言葉で伝えるという言語力が身につきます。

さらに、多重成員性というのは役割のことですけれど、例えば、ごっこ遊びの中で、一人なんだけどたくさん役割を担うよということをやります。それを経験していると、おとなになってからとても役に立ちます。皆さんもそうだと思いますが、お家に帰ると子どものパパやママであり、仕事場にいくと担当があり、ママだって地域で何かをしていると他の役割を担っています。あるいは嫁であり妻であり、いろいろな役割を一人の人間は一生か

けて担います。もし一つしか役割を担えなかったら、家から出られないことになります。できれば、いろいろな役割を担うことが嬉しいと思って社会に貢献してほしいので、それがごっこ遊びの中にたくさんあるように思えます。

社会性とセットです。イノベーション力、すごく大事です。それから知的な理解力。これも遊びの中にあります。それから物を何か操作する力。はさみで切ったり、料理をするための道具を揃えたり、ごっこ遊びには操作性があるものもたくさんあります。

世界は面白さに満ちている

「世界は面白さと喜びに満ちている。」と子どもは思い、そして、世界を変えられると思っています。大げさなことではなくてそう思っています。ですから、七夕のお願い事に、子どもはたいそうなことを書きます。「プリキュアになりたい。」「アナになりたい。」など、自分は何れと信じています。「なりたい」と思っているから書いているのです。年齢を重ねるごとに現実的なお願い事になってきますが、子どもはもっとファンタジックであります。

自ら「世界」とかかわることで自分は「世界」を変えられると思っているのかもしれませんが。

これからの教育

21世紀型スキルといって、「21世紀を生き抜く力をつけていきましょう。」とこれからの世の中が変わってきます。

幼児教育だけでなく、小学校教育、中学校教育もこちらの方に進んでいます。

21世紀型スキルには、2つのスキルがあります。認知スキルと非認知スキルです。認知スキルというのは、物事を考える力、数値化できる力です。非認知スキルとは、認知スキルでは計れない他の能力のことです。皆さんの世代ぐらいまでは、多分偏差値教育の真っ只中でしたから、この認知

スキルばかりが注目されました。

これからは、「非認知スキルとのセットが大事。」という教育に変わってきます。小学校教育も変わってきます。アクティブラーニングと盛んに言われています。知識を貯め込むだけでなく、知識を使って世の中を変えていく力が学力となっているので、アクティブラーニングが大事と言われているのです。「みんなと相談しながら問題解決していこうよ。」という訳です。みなさんのお子さんが大学受験する頃には、日本の教育がすごく変わってくると思います。その時に耐えうる力を今からつけたいものです。

いっぱい遊ばせてください。一緒に遊んでください。そうすれば楽しい世界が広がってくると思います。

**子どもをみつめる親のまなざし
—子どもの育ちを共感的にみつめ、支えるために—**

平成 28 年度開催「乳幼児期の子育て・子育て講座」より抜粋
(講師 高嶋景子氏、H28. 6. 7 開催)



子ども子育て支援新制度

昨年度から、子ども子育て支援新制度がスタートしました。新制度には、二つの大きな柱があります。

一つは、保育の量の拡充で、受け皿を増やし待機児童を解消していくことが目標として掲げられています。ただ、それと同時に、保育の質の改善というのももう一つの大きな柱として位置付けられているのです。では、保育の質の改善とは何でしょうか。制度的には、例えば保育者の給料を上げる処遇改善や、子ども一人あたりに対する保育士の数を少し増

やしていけないかという配置基準などのところで検討がなされていますし、取り組みが始まっています。ただ、それだけで保育の質が改善されるのだろうかと考えた時に、日々子どもとのかかわりの中で子どもにとっての「保育の質」を探っていくことも実はとても大事な問題です。

乳幼児期に求められる力を 考えていくこと

「乳幼児期における“教育”とは何だろうか。」「どのような教育が求められるのか。」について、それぞれの方が抱くイメージは様々です。

小学校に入る時だけの問題ではなく、小学校以上、そして生涯にわたって、その人の学びに向かう姿勢というものを培っていく育ち、学びというのはどういうものなのか、それが乳幼児期においてどのように育まれていくことが求められるのかを丁寧に考えながら、乳幼児期に求められる教育・保育のあり方を探っていく必要があるのではないのでしょうか。

米国の研究から見えてきたこと

近年、OECD の報告書等では、米国の「ペリープリスクールプロジェクト」等の縦断的研究成果を基に、乳幼児期の質の高い保育・教育が子どもたちの知的・社会的な発達に対して、生涯にわたって長期的な影響を与えることが指摘され、今注目を集めています。

日本は、先進国の中でも乳幼児期の保育・教育への投資が低いほうに属しています。しかし、国際的には、「乳幼児期の保育・教育へ国がきちんとお金をかけていくことが、結果的に、健全な社会生活を営む(ちゃんと税金を納めるような)おとなを育てる」ことになると考えられるようになってきているのです。

また、ペリープリスクールプロジェクトからは、それだけでなく、もう一つ指摘されていることがあります。それは、認知的能力と

非認知的能力についてです。

実は、IQとか学力テストで計れる認知的能力については、効果が一時的なもので、長期的な成果は得られなかったというのです。

それに対して、肉体的・精神的な健全さ、健康さ、根気強さ、注意深さ、意欲、自信などの社会的情動的な性質、いわゆる非認知的能力については、後伸びする力として、その人達の将来を支えるものになっていると指摘されています。こういったものは、勉強によって身につく知識ではありません。乳幼児期に育てるべき能力として、非認知的能力は、改めて注目されてきています。

子どもの育ちへの期待

ある幼稚園の3歳児クラスで、ある日「〇〇グループでお弁当を食べる」と言い張り、一緒に食べたそうな他の子どもを仲間に入れずに、自分たちの仲間だけでお弁当の席を作ってしまう子どもの姿がありました。このような場面を目にしたら、みなさんはどのように感じたり、どのようにかかわろうとするのでしょうか。

私たちの子どもへのかかわりの背景には、意識しているしていないにかかわらず、子どもに対して、こういうふうには振る舞えるようになってほしいという期待や、想定している望ましさのようなものがあるように思います。例えば、このような場面で、みんなと一緒に食べられるように、仲間に入れない子どもの気持ちを代弁したり、両者の間をつなごうとするかかわりの背景には、「友だちの気持ち、他者の気持ちがわかるようになってほしい。」「誰とでも分け隔てなく遊べるような子になってほしい。」「『この子じゃないとだめ』『あの子はだめ』ではなく、色々な子に対して受容的に受け入れるような人になってほしい。」「仲間に入れてと言った時に、『いいよ』と返せるような子になってほしい。」などの思いや願いがあるのではないでしょう

か。そのような子どもの育ちへの願いや期待は、誰もが素朴に抱いているものだと思います。また、子どもが成長していくうえで、色んな他者と柔軟にかかわれるようになるというのは、その子にとって必要な力ですし、そういう育ちを期待してかかわっていくのは大事なことだと思います。

ただその時に、この力というのは、おとなが一方向的に指導することで育つものなのかどうかというのを振り返って考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

子どもが獲得すべき、それが望ましいとされる知識・技能というものをおとなの側で先に想定してしまい、それを子どもに対して伝えようとするに力を注いでしまうことは、私たちのやってしまいがちなかわりです。その背後には、おそらく、それらの知識・技能を獲得していくことが子どもにとっての育ちであるという考え方があるのではないかと思われます。

しかし、この考え方に立つと、身につけることが望ましい知識や技能を身につけたかどうか、望ましい行動がとれるかどうかという点に焦点化して子どものことを見てしまいがちになってしまいます。そこばかりが気になり、評価的なまなざしで子どもを見てしまうことにならないのでしょうか。また、身につけていない場合には、私たちが望ましいと考える価値規範や行動様式を伝え、身につけるための指導をしようとする。そういう大人のかかわりになってしまいます。こういったかわり、子どもを受け身の存在として位置付け、子どもたちが自ら考えたり、行動する機会を奪うことにもなりかねません。

仲間に入りたそうな子がいる場面では、「入れて」「いいよ」というやりとりを単純に期待したり、「一緒に遊んだ方が楽しいよ」「一緒に食べた方がおいしいよ」など、「一緒に」という姿をすぐに求めてしまいがちですが、それ

が本当に子どもたちの育ちにつながるかわりなのではないでしょうか。

子どもに本当に身につけてほしいことは

本来、子どもがおとなになっていく過程で身につけてほしいことは、例えば、他人が使っているものを使いたいのであれば、「すみません。僕もそれ使いたいのですけど、どこに行けば手に入りますか」「それはどうすれば作れますか」と相手の状況を踏まえてたずねる力、「いつ使い終わりますか」と交渉する力など、その時々の場合や状況に応じて複雑な判断や交渉をする力のはずです。それなのに、「貸して」「いいよ」という短絡的なやりとりでことを済ませようとするというのは、やっぱりどこかでその子どもを子ども扱いしている大人の考え方なのではないかと思えます。借りる側、借りられる側、仲間に入れる側、入りたい側の子もそれぞれに、その時々の子なりの思いや事情があるはずですよ。

子どもの姿から見えてくること

先ほどの「〇〇グループ」でお弁当を食べた子どもにも、その時の置かれた状況や思いがありました。その時期、少し周囲の子ども達とのかかわりに難しさを感じていた彼は、その日の午前中、ある遊びを通して、久しぶりにじっくりと数人の友達とかかわれたのですが、彼にとっては、それはかけがえのない時間となり、しかも、そのかわりの中で、ある子から「今日一緒に食べようね」と誘ってもらえた喜びが、「〇〇グループ」と名付け、親しみを表現する行動につながっていたのです。仲間と仲間でない人との線引きは、裏を返せば、親しみを求める相手が見つかったり、大事にしたい関係が芽生えてきたことの証でもあります。そして、そうした関係や喜びをじっくり味わい、安心感を持った後、逆に、自ら、先ほど仲間に入れてあげられ

なかった相手を気遣い、さりげなくかわりを持ちに行く姿も見られました。

このように、子どもたちは、「先生や友だちに自分が認めてもらえているという実感」「同じ目的に向かって取り組んでくれる相手がいることへの嬉しさ・喜び」「自分の思いや主張を安心して出すことができる経験」「やりたいことを最後までいっしょにやり遂げられた充足感」などが持てた結果として、その集団の中での居場所が見つけられるようになります。また、ちゃんと自分を受け止めて、認めてもらえているという感覚の中で自己肯定感も育っていきます。「誰かと何かをともにすることが楽しい、嬉しい」というところから、そこに向かおうとする志向性が生まれてきますし、自分の思いや考えをわかってくれる人がいるという思いから他者に伝えようとする意欲も育ってくると思います。そのようにして、自分がちゃんと受け入れられて満たされたという時に、初めて、自分以外の人に対しての気遣いも生まれ、行動につながるのだと考えます。

子どもの育ちを支える

おとなのまなざし

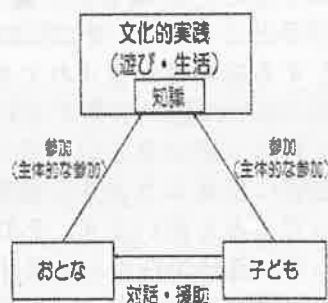
そうやって考えると、子どもの育ちが保障される基盤には、ただ単にその時の表面的な姿から、何か改善すべき状態と捉えて、一方向的に正しいとされることを教えるという指導ではなく、その子が周囲の人やもの・出来事どのように出会っているのか、そして、それがその子の育ちの過程の中で、あるいは文脈の中で、どういう意味を持っているのかということ幅広い視点で捉えながら寄り添うおとなのまなざしというものが、子どもの経験を支えていくのだと思えます。

子どもが未知なる世界に一步踏み出すために

子どももおとなも自分の周りに

ある様々な文化的実践のそれぞれに興味・関心を持って主体的に参加していくことで、結果として、その中にある色々な知識やそこでの社会的規範に出会っていくのではないのでしょうか。ただそれは、これが正解として教えられるのではなく、その世界に参加していく中で必要な知として、その子が獲得していくものです。とすれば、おとなの役割というのは、教えていくというよりは、その子が今何に参加しようとしているのか、何に面白さや難しさを感じているのかを子どもの姿から読み取り、対話をしながらその支えを考えていくことです。

○このような考え方の背後にある子ども観・発達観



知識として知っていることと現実とのギャップ

では、そのような子どもの姿を共感的に見守ったり、読み取ろうとするおとなのまなざしはどのように生まれてくるのでしょうか。

今の社会は色々なメディアをおとして、子育てにおいて大事なこと、子どもの経験として大事なことというのは情報としてたくさん発信されていて、知識としてはご存知の方もとても多いと思います。

しかし、それを実際に子どもとかわる際に保障できるかという難しい時もあるでしょう。例えば、公園などで我が子が他のお子さんと物の貸し借りや順番などで衝突した際、とっさに介入せずに見守ってられるかという難しいことも多く、ついつい干渉してしまうこともあると思います。そのような際には、知識として知っていることと、現実に出

来事が起こった時の自分の行動とのギャップに悩むこともあるのではないのでしょうか。

実は、情報として得られる知識というのは、どこか自分と関係ないところで生み出されている一面もあり、あくまでも一般化された望ましい育児のあり方や、何かこうあるべき像として、望ましいものとして一方向的に与えられたものとして受け止められている場合、自分にとって、本当に自分の行動を支えたり、変えてくれるものになり得るかという難しいところもあると思います。

その一方で、保育園や幼稚園などの保育者をおとして語り紡がれる子どもたちの具体的なエピソードというのは、我が子の姿を伝えてくれるものであり、しかもそのエピソードから、子どもが自分とは異なる意志や思い、育つ力を持った一人の他者であるということに気づかせてくれるものでもあります。特に、子育てや子どもに対する評価的なまなざしでなく、その子のやっていることやかかわっている世界を味わい、喜ぶまなざしから語られるエピソードは、その面白さや奥深さを共有しながら、「～君にとって、今の経験はどういう意味を持っているのだろう」「それがどのような育ちにつながるのだろう」ということを一緒に考える資源にもなっていきます。そして、それが結果として、保護者にとっても、誰かに言われた正解としてではなく、「これまでの自分のかかわりはどうだったのかな」と自らを省みる材料となっていくと思われます。たくさんの人の語りや視点に触れながら、そうした自己内対話をする際の自分なりの視点を増やしていけると、子どもの姿を見る見方も広がり、どんどん面白くなっていくのではないのでしょうか。

驚きをもって子どもの姿を見る

私たちおとなが子どもとかわる時には、子どもの側からもの

を見られるようになりたいものです。それは、わざわざ上から下におりるということではありません。子どもたちの持っている力のすごさ、子どもたちのしていることの面白さや奥深さというものに驚きを持ち、発見していこうとする、対等な人として、そのことを見ていこうとすることです。こういった私たちの姿勢というものが、実は、子どもとともに対話的な関係を築くためのベースにもなっています。

子どもとの対話的な関係を築くために

とは言え、そのように心掛けていけば、いつも子どもの姿の持っている意味が見え、対話的な関係が築けるかと言えば、そうとは限りません。誰しも、子どもの姿やその意味が見えている時もあるれば、見えにくくなってしまいう時もあります。見えにくくなっている時に支えとなるものは何かいうと、やはり、一緒にその子を見ようとしている周囲の保護者や保育者などとの関係ではないのでしょうか。どちらかがどちらかにアドバイス、指導、評価するという関係ではなく、それぞれがその子についてわかりたいという思いを持ちながら、見えたことを互いに共有して行くことで、それぞれに気づきやまなざしの広がりが生まれてくると思われれます。そして、そのような周りの大人のまなざしの広がりが、その子がその子らしく生きられるような時間や環境、そして様々な経験が保障されることにもつながっていきます。

子どもたちの豊かな育ちを支えていくためにも、そのような周囲の大人の対話的關係が広がっていくことが期待されますし、そのような関係づくりを大切にしていきたいと思います。

【研究研修担当】